

登山計画書を考える

登山計画書の提出を義務づけた自治体がある。エベレストをめざすならいざしらず、そこいらの山なら無事に下山しさえすれば、計画書なんて紙くずでしかない。しかし、そこいらの山でも、計画書も出さずに入山して万一トラブルが発生すると、とんでもないことになる。それが、登山というものだ。

「山に行ってくるよ」と、奥さんに一言いうだけで山に行ってしまう人がいるらしい。「らしい」というのは、そういう話しを聞いただけで、ぼくの周囲にそういう人はいないからだ。前出の彼、夕方になれば機嫌良く帰ってくるのが常だったので、奥さんとしても心配していなかったが、その日、夕方になっても帰ってこない。夜十時過ぎても帰ってこない。さすがに心配になった。翌朝、早々に近所の交番に行った。

「どこの山に行ったんですか」、おまわりさんに聞かれても返事のしようがない。登山計画書なんてものはないし、山に興味なかったのも、山行きに関わるやりとりなど日常的にしていなかった。出かけた山が分からないのだから、対策を立てようがない。

「丹沢にいってくる」、と言って出かけたのなら山は特定できるが、丹沢と言ってもいささか広い。情報不足で捜索隊を出せない。「大倉尾根登って、塔ノ岳に行ってくる」、これでも不十分だ。塔ノ岳から先はどうするのか。往路をもどるのか、鍋割山に回るのか、手前の小丸尾根を下るのか、表尾根に行くのか、丹沢山に向かうのか、捜索範囲はかなり広い。盛夏なら水さえあれば十日くらいは過ごせるだろうが、厳冬だったりしたら……。登山計画書の提出は、自治体のためにやるものではない。自分自身の安心安全のためにやるべきことなのだ。

最近山登りに目覚めた知人に、「北高尾山稜が面白いよ」とアドバイスしたら、一週間後にメールが入った。「高尾山の隣なのに登山者が少なくて、いいコースですね。堂所山に着いた時間が早かったので、南高尾山稜まで回ってきました」。後日会ったとき、一人で行くことが多いから登山計画書を書くようにした方がいいね、とアドバイスした。

「計画書の範囲からはずれた所に行ってはだめ。帰ってこないからと捜索隊を出さずにしても、その範囲から捜索をはじめると、計画が堂所山までだったら、時間が早くても堂所山から下山するのが基本。その先にも行くことを考えているんだったら、12時前に堂所山に到着したら南高尾山稜に足を伸ばす、ということを計画書に付記しておくこと。エスケープルートなども書きこんでおくと、いざというとき有効だよ」

万一事故が発生した際、捜索救助活動の第一歩は登山計画書からはじまる、ということ肝に命じておきたい。計画書を作る過程は、計画の再検討にもつながる。計画の縮小やグレードアップ、エスケープルートの確認など、安心登山の第一歩も登山計画書からはじまる。